

私立 女子美術大学

私立 女子美術大学短期大学部

プログラムの名称

美大でのリエゾン型キャリア形成支援の展開
——キャリアポートフォリオを携えてソーシャルデビュー

プログラム担当者

芸術学部長・教授 小倉 文子

キーワード

1. 作品ポートフォリオ 2. 社会性獲得 3. キャリアポートフォリオ
4. 卒業生サポート 5. アーティストアーカイブス

1. 大学の概要

女子美術大学の前身、私立女子美術学校は1900(明治33)年、美術教育の女性への解放、美術による女性の自立、及び、女性の社会的地位の向上、教育者の育成を目的として設置された。私立の美術大学としては日本で最も古い歴史を持ち、創立以来100年以上に亘り、新しい価値観を切り拓こうとした幾多の芸術家、デザイナー、教育者を輩出してきた。本学は、我が国の美術界において指導的な役割を果たしてきたと同時に、女子の高等教育機関として先駆的な活動を展開している。

1949(昭和24)年、新制大学として発足、翌年には、今回の共同申請者である短期大学部を併設し、短期高等教育においても貢献してきた。更に1994(平成6)年に大学院美術研究科修士課程、1996(平成8)年に博士後期課程を設置し、付属中学・高校から大学院博士後期課程までの教育体制を整え現在に至る。大学(芸術学部)は、2001(平成13)年4月の改組により7学科2専攻を有する。絵画(洋画専攻、日本画専攻)、工芸、デザイン、芸術学の4学科に加え、現代社会の動向を踏まえ新たにメディアアート、ファッション造形、立体アートの3学科を設置し、今日の美術大学に期待されるほぼ全領域を整えた教育組織を実現した。

現在、都市部(東京都杉並区)と郊外(神奈川県相模原市)に2キャンパスがあり、杉並校地では、短期大学部及び付属中学・高校生が学び、相模原校地には芸術学部生及び大学院生が学ぶ。相模原キャンパスでは2001(平成13)年に創立百周年事業として美術館を開設し、〈地域社会と美術教育現場との連携による新しいタイプの美術館〉を目指して活動している。更に、学長指導の下に、現代社会や学生の動向を踏まえ、芸術学部と短期大学部、大学院を挙げて、21世紀に必要とされる新たな視点から大学改革に向けて着手している。

2. 本プログラムの概要

本取組は、初等・中等教育機関、企業等と本学のリエゾン(連携)により、学生達がキャリア形成を通し社会・地域等との関係性を育む実践プログラムである。アートツールとして使用する美術大学の作品ファイルを、一般大学の学生の自分史、自己表現のメディアへ汎用化する試みでもある。本学は学生の表現活動の範囲拡大を目的に全学で作品ポートフォリオ制作に取り組み、学生自身の社会性獲得を実現する。手始めに、学生の学習履歴を記録しキャリア形成を支援する電子ツールを開発し、実物と電子のキャリアポートフォリオとして学生の人間の成長の足跡を残し、教職員、卒業生、企業人との豊かな交流を促す。

またキャリアポートフォリオを学生のピアサポートに用い、卒業後の表現者の揺籃期と、更にそれ以降を継続支援する卒業生サポートのデータベースとしてアーティストアーカイブスに進化・発展させ、学生が社会へ繋がるリエゾン型キャリア形成支援を展開する。

3. 本プログラムの趣旨・目的

(1) 動機と背景、目的

本取組は地域から老人・若者・子ども等が孤立し、人と人との繋がりが希薄化する世相を受け、学生がキャリア形成を通して社会や地域の中で、人々との繋がりを回復し育むことを目標としている。学生の成長による能力向上と社会性獲得の試みがピア(peer:仲間)サポートであり、作品ポートフォリオ制作の取組である。個人が記録や作品を残すことは表現するという一つの行動である。その行動が個人の振り返りや内省に繋がり自己の成長過程となる。作品として残すこと自体が社会性を得ることに学生自身が気付く取組でもある。

人が成長するには意思が必要であり、意思を持ち行動することの意味や価値を知る時、初めて情報や体験は経験化され知恵となり、生きていく力に結実する。これが自己表現の意味であり、学生を表現者として育成し社会に輩出する美術大学の使命に適合する。

更に、2005(平成17)年1月の中央教育審議会答申『我が国の高等教育の将来像』で触れた「教育の質の保証」について、本学では学生の質や教育・研究等の質は大学が学生教育を4年間の完成教育と見るのではなく、学生の生涯を見つめ、卒業した後もキャリア形

成の途上にあると捉え、一生を通して支援し続ける体制の構築により保証できると考える。

(2) 取組の意義

キャリア形成支援の意義は学生の未来を創ることにある。本取組では、入学時から学生自身が学習を積重ね、キャリアを通して自己の未来の姿を描き、ビジョンを持ちキャリア形成のスタートで目標を定める。学生が目標へ向かい戦略を立て、キャリア形成学習により自ら知を創造していく方法を提起する。ゆえに本学

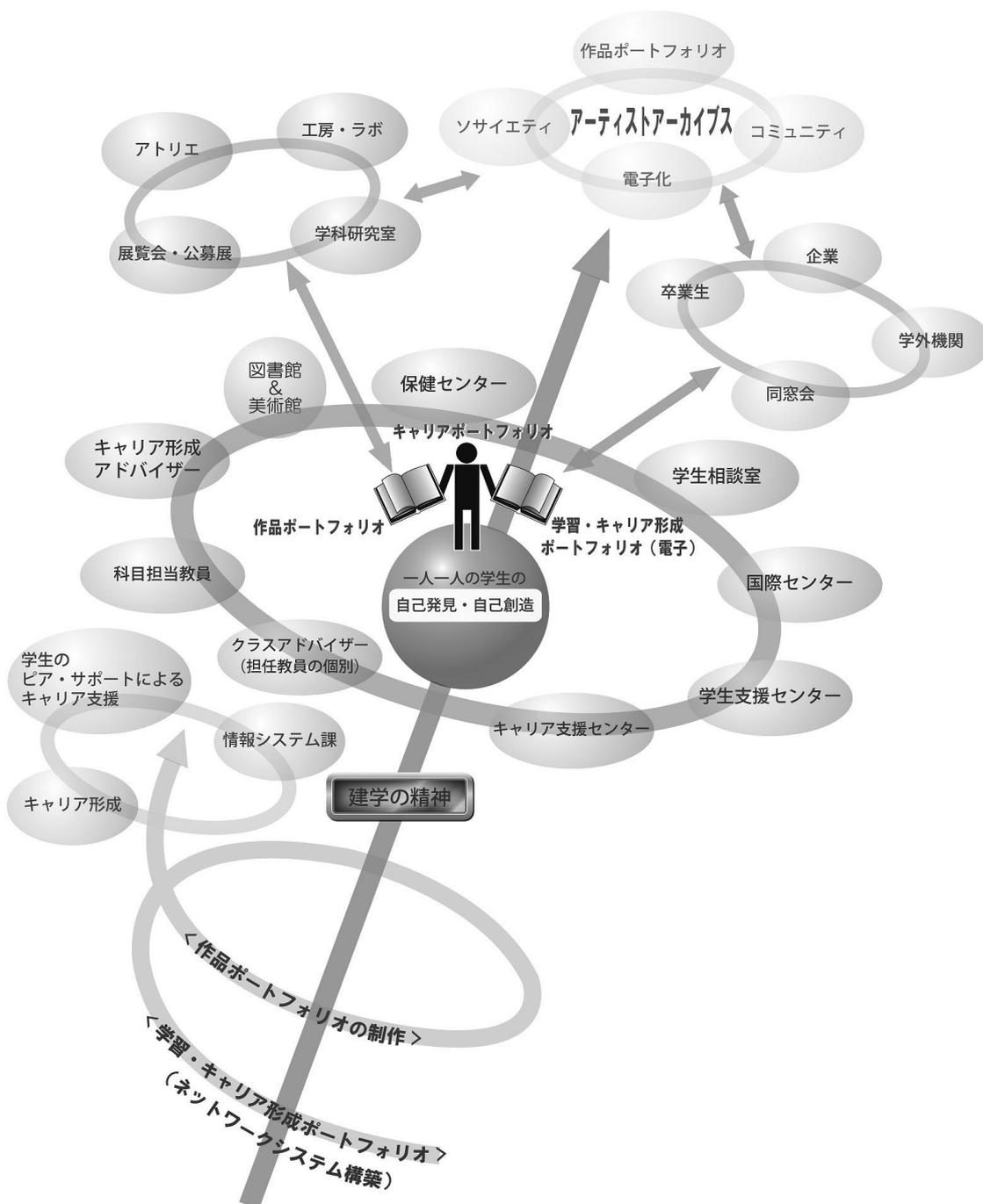


図1 学生(卒業生)支援機構

のキャリア形成の共通認識は、生きる力を身に付けることであり、問題発見・分析・情報収集・解決力等を向上させ、イメージ喚起・コミュニケーション力等のコンピテンシーを高めることである。

学生がキャリア形成の目標を明確に意識することで、現実と対峙し問題解決しながら知を獲得し成長する、体験型学習等が有効に機能し社会・地域への理解を深める。社会や他者に貢献する意義を知ることが、自己表現の創出の根拠となり社会性獲得を導く。

この学習支援手法のツールが電子ネットワーク＝〈学習・キャリア形成ポートフォリオ〉である。学生自身が記した学習目的・成果・履歴や相談について教職員はアドバイスや指導を行い、記録を残すことが可能な双方向性のコミュニケーションツールとして活用される。

4. 本プログラムの独自性(工夫されている内容)

美大では、学生の作品ポートフォリオ制作は珍しいものではなく、学生が作品ポートフォリオを携行する姿は日常的な風景である。しかし、卒業制作作品・論文等の提出時に作品ポートフォリオ制作をカリキュラムで必修化し義務付けている訳でもない。そこで本学は独自に、全学を挙げた〔作品ポートフォリオの制作〕に取り組むことにした。作品ポートフォリオは、研究論文を主体とする総合大学や一般大学での研究データ、写真、イメージ図等を、学生生活の実物記録として再現することに応用が可能であり、有効なプレゼンテーションツールとなる。具体的に正課あるいは課外学習として、学生が写真撮影、メディアの作成、加工技術、PCのスキル等を習得する。教員が各長期休暇の前後を利用し、〈図1〉の通り学生のピアサポートの場を提供することで、学生相互に作成が容易となり、作品ポートフォリオは学生時代の足跡として一生の記念となる表現行為であり、社会へデビューする際の自己証明となる。

〈卒業生サポートの工夫〉

学生は、電子化した〈学習・キャリア形成ポートフォリオ〉に、文字情報や画像情報を記録するとともに、作品ポートフォリオの実物を携えて卒業する。本学がこのシステムを利用し企業の現場とのコラボレーションの機会を多く設定することでキャリア形成支援も有効に機能する。他に企業の人事担当者が学生の職業・職種への志望を知ることが可能な開示システムとする。更に結婚出産等で離職を余儀なくされた卒業生の

再チャレンジを支援するために、〈人材バンク〉への登録を行うほか、社会人の学び直しのためのスキルアップ教育の支援プログラムを構築し、キャリア形成の第二ステージを用意する。社会や学生、卒業生のニーズを踏まえ、現行のキャリア形成を基に、単年度で帰結する就職を優先するプログラムではなく、在学中、卒業後にわたり継続する段階的なキャリア形成支援の体制を、新たな学生（卒業生）支援機構として構築する。

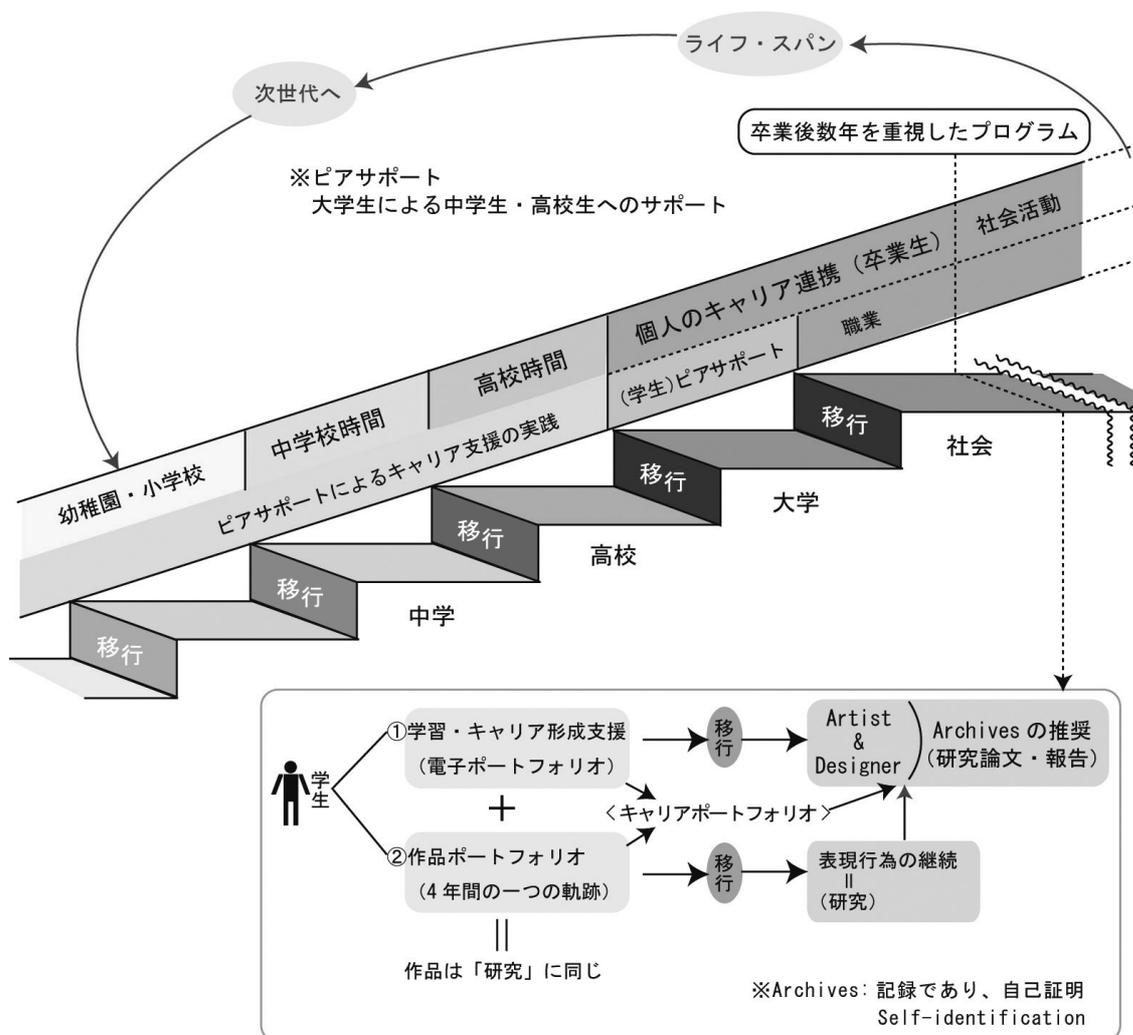
5. 本プログラムの有効性(効果)

本学は、専門性を軸に心を開き、手をつなぎ、人を拒絶しない、支え合う共生の精神〈共に生きる〉を背景に学生のピアサポートを行う。教職員に訊ねるよりも、先輩や友人には気軽に質問できる学生相互の支援制度として、1年次から4年次迄の全学生を対象にピアサポートを位置付けキャリア形成の支援に適用する。学生が同じキャリア形成の途上にある仲間として、学生自らの責任感と使命感により実践する仕組みとする。

本取組は小学校や中学校、高等学校でのキャリア形成支援を学生が行い、ピアサポートに真剣に取り組むことで、自らのキャリア形成の意義と方法を会得して行くことを目的とする。学生自身が、生涯の選択を卒業時に迫られるように、児童や生徒の立場でもキャリア形成への迷いや相談へのニーズがあり、その支援には有効性がある。そこで本学は各地域の教育機関と連携し、学生が夏休等の長期休暇中を利用して、グループを組み学生の出身地域等にある小・中・高校を訪問し、キャリアへの相談や助言のピアサポートを実践する。

個人が企業等に就職しその中で職位・職務を獲得することを指して、キャリアが達成されたと見る時代から変化し、現在、キャリアは、個人の一生涯を通して実現されるものであり、自らが価値付けるものであり、本学では捉えている。

従って、本学の取組は、学生時代4年間の期間限定型の支援ではなく、〈図2〉のように幾つもの機関や人々との多角的、段階的連携と交流により実践されるリエゾン型キャリア形成支援の展開である。卒業後数年間を表現者としての揺籃期、重要なキャリア形成期と捉え、この時期以降を重視して本学は生涯のキャリア形成を支援する取組を実践する。美術大学の制作活動は一般大学での研究活動に当たるもので、本取組は



キャリアとは就職（職に就くこと）により達成されたと見るのではなく、一生涯を通じて実現されるものであり、自らが価値づけるものであると捉えている。

図2 リエゾン型キャリア形成支援

卒業生が手掛ける研究を一生支え、応援し続ける大学でありたいと望む全ての大学に有効性をもつ。

(1) 相乗効果、社会と学生のニーズ

学生に制作や表現する目的意識を高める意図から授業形態や研究体制として、異分野の自治体や企業と他大学と本学のリエゾン（連携）体制を取る。この前進には、本学がコラボレーション（協働）型の取組やプロジェクト型学習を推進し増加することにより、社会や企業のニーズを積極的に受容できる。その意味で学生が企業との協働（コラボレーション）プロジェクトに参加することで、社会参画の機会を多く設ける共同作業（コラボレーション）が、より一層学生に実力を付ける具体的プログラムとなる。

社会変化が企業変化を追い越す時代に、企業と卒業生との関係も変化し、企業に卒業生を任せ放しにする

のではなく、生涯を懸けてキャリア形成する学生・卒業生に、本学が知識・技術を新たに供給する体制を構築しブラッシュアップする。コラボレーション型キャリア形成支援は社会人の学び直しを含め、新たな知見（知識の高度化と体系化）を女子美術大学や大学院が提供して行く、独自の教育研究体制の構築であり、大学改革に帰結する。

本学では、内閣府が唱える男女共同参画社会における女性の社会進出を目的にワーク・ライフ・バランス支援を推進している。美大におけるワーク・ライフ・バランス支援とは、キャリアデザイン（人生の設計図を描くこと）を実践し社会人への自立を支援することである。更に、女性の特徴である仕事と家庭の両立を、出産・育児を預かる母の立場やデザイナー、アーティストの立場から実践できるようにする社会参画への活動支援である。

ブス》の2システムの両方の稼働を再評価し、更に精度の高いシステムとし学習・キャリア形成支援効果を高める。

(2) 本取組の実施体制

学長のマネジメントの下に「学習・キャリア形成推進センター」を設け運営支援の窓口とし、キャリア支援センター、学生支援センター、企業、同窓会等と教職員が協働し全学で取組を実施する。予算措置根拠等経費面を含め全学支援、推進体制を整備する。

本取組では、計画がどのように企業や卒業生、社会に受容されるか事前・事後調査により検証する。キャリア形成のシステムは公開に際し、特に企業、卒業生等への開示範囲の限定も必要である。一方、アーティストアーカイブスは、社会への情報公開を第一とし方法、内容の適切性を調査・評価し、システムの検証を行い本取組に反映し改善する。

更に、活動の成果を、本学に留まらずシンポジウム、電子印刷媒体、インターネット等により全国公開し、効果測定を実施しつつ社会に開かれた取組プログラムとする。

(3) 期間終了後の展開、将来的課題

現時点の課題として、キャリア形成への学生の要望は強く、重要性について共通認識する教職員の数も増え全学的拡がりを見せているが、キャリアポートフォリオやアーティストアーカイブスへの要望は、電子ブック機能の追加を含め多様化が予測される。今後の課題として、本学1校だけではなく、他の美大や一般大学と連携し、作品ポートフォリオ制作やアーティストアーカイブスをともに学び、活用する方向で、ネットワークを組み、学習・取組方法等の研究会、協議会、展覧会等の開催により研鑽を深める施策が必要である。

選 定 理 由

女子美術大学においては、学生を大学の中心に位置づけ、教職一体となり、協働して学生の成長と人間としての自立と社会的対応能力を育成するという明確な理念を有しています。

そして、キャリア形成を一生涯を通して実現させる人間の生き方として支援するために、「学生キャリア形成推進センター」において組織的に実施し、更に横の連携を目指しています。その結果は、地方自治体、まちの人々、NPO、企業等地域社会との協働としての作品ポートフォリオ制作により、学生の成長と社会性獲得をもたらしており、支援のプロセスも明確で、特に、美術系の学生を支援するプロセスに他に見られない新規性と独自性のある取組であると言えます。また、個々の学生の作品ポートフォリオを電子ネットワーク上に構築し、学生同士のピアサポートや教員による指導も行っています。

更に、4年間を通じて、小学校や中学校、高等学校でのキャリア支援とピアサポートにより、リエゾン型キャリア形成支援を展開するとともに、卒業後も含めた生涯のキャリア形成を支援する取組であり、他の大学等の参考となる優れた取組であると言えます。